

株式会社コダイラ

代表取締役社長 小平 三知恵 氏
遠藤 勝也 氏
取締役会長 小平 隆一 氏



栃木県鹿沼市に本社を置く株式会社コダイラは、鋼板（金属の薄板）をハンマーで叩いて伸び縮みさせ、曲面など立体的な形状を生み出す「叩き出し技術」による精密鈹金を得意としています。

日本の鉄道史に残る各種鉄道車両の先頭部を数多く製造してきたパイオニア企業の技術を未来永劫、鹿沼の地に残し続けるために、同社は常に新しい技術を取り入れ、次代に沿った企業へと成長し続けています。

先代で現会長に事業拡大の経緯や事業承継への想い、そして、2代目に就任した社長に未来への想いをお聞かせいただきました。

インタビュー日：2020年7月16日
〔聞き手：筑波総研(株) 取締役社長 野口 稔夫〕
〔文・写真：筑波総研(株)〕

企業概要

本社：栃木県鹿沼市さつき町13-3
創業：昭和26年8月
設立：昭和43年2月
事業内容：特殊車両・車両部品の製造
（鉄道車両鋼体・台枠・台車・ぎ装・特殊車ボディー・建機など）
ステンレス・アルミ材の各種部品の製造
従業員数：30名
会社HP：<http://k-kodaira.com>

小平会長が創業された経緯や御社の事業内容についてお聞かせください。

15歳で「集団就職」、钣金技術を体得する

私は栃木県日光市の出身です。中学校を卒業後、15歳の時に「集団就職」で東京へ出ました。「飯さえ食えれば、給料はいらぬ。修行させてほしい」と技術力の高い先輩を頼って、計4社の自動車钣金工場に勤務し、多様な钣金技術を体得しました。

昭和26年8月、24歳になった私は、親の実家である栃木県鹿沼市に戻り、東京から連れてきた2人の若手技術者、そして父と一緒に、小さな水車小屋を借りて钣金会社を創業しました。

何十社も回って営業を続けましたが、頼りになる人脈も立派な設備も無い私たちは、蔵の修理など他社が請け負わない安価な仕事しか受注できず、全く稼げない苦しい日々を過ごしました。

鉄道車両の精密钣金業務に活路を見出す

転機となったのは、富士重工業(株) (当時) からの孫請け業務で、日本国有鉄道 (現 東日本旅客鉄道 (以下、JR東日本)) 「郡山総合車両センター」などの鉄道車両基地で、鉄道車両の基本構造部「鋼体」の钣金業務を請け負ったことです。

難しい業務を完遂したことで、大手企業からの信頼を勝ち取り、さらに、高精度な钣金技術が高く評価されたことで、「他所で出来ない仕事は、『コダイラ』に持っていけ」と言われるようになりました。



工場内で溶接作業を行う技術者の様子

事業が軌道に乗り始めた頃、工場新設のため、茨城相互銀行(現 筑波銀行)に融資相談をしました。まだ実績が乏しかったにもかかわらず、ご快諾いただき、約480坪の新工場建設にこぎ着けま

した。正直、借金返済への大きな不安はありましたが、前だけを見つめ、ひたすら働き続けました。



先頭部鋼体

JR東日本など大手企業から信頼されている御社の独自技術についてお聞かせください。

独自の「叩き出し技術」が作る鉄道の「顔」

当社は、鋼板をハンマーで叩いて伸び縮みさせ、曲面などの立体的な形状を生み出す「叩き出し技術」による精密钣金を得意としています。

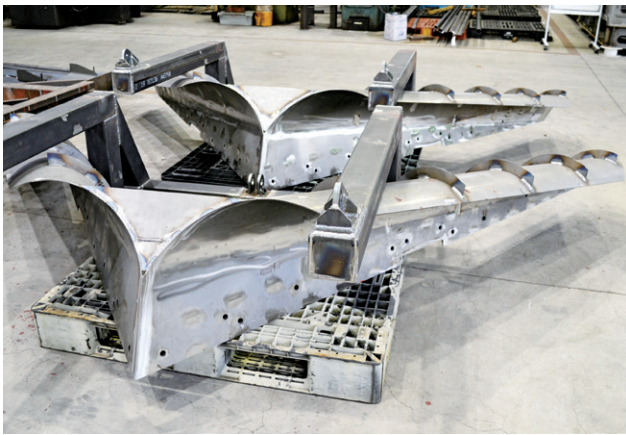
郡山総合車両センターでは、鉄道車両の精密钣金業務を数多く引き受けましたが、特に印象に残っているのは、当社を現在の地位まで押し上げた鉄道車両の先頭部の修理業務でした。

正直、鉄道車両などの胴体部鋼体の製造は、特殊技術を保有しない企業でも可能です。しかし、各種鉄道車両などの「顔」を美しい曲面で作り出す精密钣金技術は、一朝一夕で体得できるほど、簡単なものではありません。

当社は、中小企業と直接取引を行うことが珍しいJR東日本をはじめ、(株)日立製作所など大手企業から直接受注しており、年間で約80台もの先頭部を納品した実績もあります。



独自の技術を説明する小平会長



鉄道関連部品(雪かき)

日本の鉄道史に残る車両製造に携わる

当社は現在までに、かつて上野駅と札幌駅間を往復した寝台特急カシオペア「スロネフE26」をはじめ、北海道旅客鉄道(JR北海道)が導入した特急形気動車「キハ261」、新幹線「のぞみ」の主力として活躍する「N700系」、茨城県下館駅と栃木県茂木駅を結ぶ「モオカ14型」、ケーブルカーの線路として日本一の急勾配を走る「高尾山ケーブルカー」など、日本の鉄道史にその名を残す各種鉄道車両の製造に携わってきました。

茨城県筑西市にあるテーマパーク「ザ・ヒロサワ・シティ」内のレイルパークには、歴史に名を遺す貴重な車両が大切に保管されていると聞き、長年、鉄道車両に関わってきたものとして、嬉しく思います。

曲面を作り出す技術は、大変難しいと聞いています。どのように体得されたのでしょうか。

「鋼板を平らにする技術」が出発点

曲面の強度設計は、非常に複雑な計算を行います。しかし、図面通りに組み立てても、鋼板の僅かな歪みで応力が発生し、歪みや割れが出てしまうことがあるため、加工には細心の注意が必要です。

優秀な人材が揃う大手企業でさえ「設計図通りに作っても、振動が来ると割れてしまう」という悩みを抱え、当社は何度もアドバイスを求められました。

当社の技術者は、鋼板の特性を見極めた上で、まず、鋼板を平らに伸ばすことに注力します。その後、ハンマーで叩き出しの作業を繰り返し、美しく強い、理想の形を完成させていきます。

美しい曲面を作り出す精密钣金技術は、日本が世界に誇る技術の1つであり、当社は常にその先陣を切ってきました。

しかし、長年培ってきた技術を若手技術者に伝承するのは、非常に根気のいる作業です。钣金技術を指導する際、「ここを10回叩く」と言っても、叩き方ひとつで、鉄の伸びる方向が変わります。

また、一見すると簡単そうに見える溶接技術も、「どこに仮溶接すると、どの方向に倒れるか」など、先を見極める確かな目を養う必要があります。

昔のように、「親方のやり方を見て盗め」とは言えません。叩き方の力加減や溶接加減の見極めは非常に難しく、“言葉では伝わらない感覚”を伝えるためには、長年の歳月が必要となります。

器用・不器用には個人差があるほか、積極的に質問できるかどうかの違いも、技術の習得の速さに差が出ているように感じています。実際当社では、真面目で大人しい者より、少し“やんちゃ”な方が、技術習得が早い傾向にあります。



工場内の様子

新設備の導入による業務範囲の拡大

当社は、鋼板の切断能力の向上、そして、受注範囲の拡大を目指し、中小企業庁「ものづくり・商業・サービス新展開支援補助金」(平成27年度)に応募し、無事採択されました。

平成28年10月には、厚い鋼板を精密に切断のできるファイバーレーザー切断機の導入により、これまで使用していたレーザー切断機より、業務効率を約30%も向上させることに成功しました。

これにより、鉄道車両の先頭部などの上部構造だけでなく、その構造を支える「台枠」など下部構造を含めた一体受注体制を構築することができました。また、付加価値が付いたことで、業務の範囲が広がり、受注の平準化にもつながっています。

■ 会社を育てた「親心」と事業承継への想い

私は、仕事が取れない時、借金を抱えた時など、誰にも相談できない事態に陥った時には必ず、親の墓石の前で「とーちゃん、俺、どうしたらいいのか」と独り言を言い、そして、唾をぐっと飲み込んでから覚悟を決めて歩き出す、そんな日々を過ごしながら、ここまで歩んで来ました。

現在、最も気を揉んでいるのが、事業承継です。せっかくここまで会社を育てたのだから、この地で培ってきた技術、そして、お客様からの信頼を確実に未来へつなげたいという「親心」は、現役引退後も強く感じています。

若い頃は私自身が技術を高め、経営手腕を発揮して会社を引っ張れば良かったのですが、次の世代に技術や経営の考え方を伝えることは、大変難しいと痛烈に感じています。もしかしたら、商売を始めて以来、最も辛い経験かもしれません。

現在は、専務職に携わっていた遠藤勝也と娘の三知恵、2名を代表とし、工場全体管理・財務管理に関する継承を一丸となってスタートしています。

経営を引き継がれた小平社長が大切にされている想いをお聞かせください。

■ 幼い頃から父の働く姿を見て育つ

私が社長に就任したのは、今から3年前の平成29年です。それ以前は、当社の経理部に所属して発注業務などを担当していたため、事業全体の流れや現状は、常に把握していました。

しかし、恥ずかしい話ですが、父から技術的な話、ましてや苦労話などを聞く機会が無かったため、今回の取材を通して、会社に対する熱い想いを知ることができ、大変感激しています。

私が幼い頃から父はいつも忙しく、家でくつろぐ姿は、ほとんど見たことがありません。私は保育園から帰ると、いつも妹と一緒に、父の工場から火花が散っている様子を見ていました。

最初の頃は、タンクなど小さなものを製造していましたが、月日が経つにつれ、鉄道車両などの大物が目に入るようになり、子どもながら、父の働く姿を誇らしく感じていました。

当社の技術力は、工場訪問されたJR東日本の担当者が、鍍金の精密さ、組み立て方の斬新さに、目を見開いて驚くほど完璧なものであり、業界内でも高い位置にあることは確かです。



事業承継の想いを語る小平会長(右)とその想いに耳を傾ける小平社長(左)

■ 「コダイラ」ブランドを未来永劫に

私はこの技術を未来永劫、鹿沼の地に残し続けるためには、「当社が長年培ってきた伝統を大切に温めつつ、常に新しい技術を取り入れ、次代に沿った企業へと成長し続けなければならない」と強く深く感じています。

先代の時代と、私たちがこれから向かう時代は、全く同じではありません。会長が現場を離れた分、技術者たちの技量は、以前より格段に上がっています。

それは、責任感が増したこと、そして、自分をさらに高めていきたいという強い意志の表れであり、とても頼もしいと感じています。

女性社長として、社員をはじめお客様への細やかな対応を大切にしながら、先代から受け継いだ「コダイラ」というブランド力をさらに昇華させるために、社員とともに力強く邁進して参ります。



小平隆一会長(中央右)、小平三知恵社長(中央左)
筑波銀行 鹿沼支店 百目鬼支店長(左)、聞き手・野口稔夫

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただき、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。